

中国語の音声学習について

岩 崎 皇

1. はじめに

我々が言葉の存在を感じるのは、それが音声あるいは文字という存在形態をとった時である。意味はそれら二つの形態に随伴して、あたかも容器に対する中身のように意識される。例えば、「聞く」とは音声という容器から中身である意味を取り出す行為であるというように。

外国語の学習は、「読む」にしる「聞く」にしる、全て意味を取るということが目的になっているが、その事にこだわると却って学習が妨げられてしまうことがあるように思う。

「読む」のとは違ってリアルタイムで音声処理をしていかなければならない「聞く」ことにおいては、特にそれを強く感じる。

2. 音声の聞き取り

中国語音声の聞き取りには二つの側面がある。まず第一に、一つ一つの音節を正確に聞くこと。つまり、同じ音節は同じものとして、異なる音節は異なるものとしてはっきりと区別できることである。もう一つの側面は、次々と流れてくる音声を、文単位で記憶(短期記憶)できることである。

(1) 正確さ

中国語の場合しばしば、異なる音節が同じ音に聞こえてしまうという事情がある。典型的なものは、鼻音を伴う母音 an と ang、in と ing、uan と uang、お

よび子音 l と r の区別であろう。それらに関しては、ほとんど「お手上げ」状態と言ってよいかもしれない。その他に、これほど極端ではないが、違いを感じにくいものがある。試みに筆者なりにリストアップしてみると以下のようなになる¹⁾。

- ① (1) an と ang、uan と uang、in と ing
- (2) l と r
- ② (1) 声調の区別
- (2) 有気音と無気音の区別
- ③ (1) e と u
- (2) eng と ong
- (3) i と ü
- (4) fu と hu と he
- (5) zi と zu と ze、ci と cu と ce、si と su と se
- (6) ji と ju と zhi、qi と qu と chi、xi と xu と shi
- (7) jia と zha、qia と cha、xia と sha
- jiao と zhao、qiao と chao、xiao と shao
- jiang と zhang、qiang と chang、xiang と shang
- (8) jun と zhun、qun と chun、xun と shun
- (9) jiong と zhong と zheng、qiong と chong と cheng、xiong と sheng

①は既に述べたように並べて発音されても違いを感じられないほど似て聞こえる²⁾。②③は程度の差はあるが、何らかの違いを感じるはずである。

教学においては、②と③の区別がメインになる³⁾。本文等の発音練習の際には折に付け指摘して注意を促す必要がある。

音声を正確に聞き取れるようになるためには、繰り返し聞くことが大切だが、その際、聞こえた音がなんであるかは常に確認する必要がある。それにはピンインが非常に有効な道具となる。全てをピンインで書いてみる必要はないだろ

うが、例えば、子音は zh なのか j なのかというように、チェックすることが必要である。

ピンインは学習者には敬遠されがちだ。日本語に比べ区別が細かい中国語の音声を表わしているのであるから、難しく感じるのは当然であろう。

更には、もともと漢字に代わる文字として発想されたピンインには、見やすくする、或いは書きやすくするという工夫もされており、それが学習者の混乱を招く場合もある⁴⁾。

しかし、聞き取りの正しさを確認する手段としてこれ以上に簡便なものはなく、大いに学習の助けとなるのであるから、辛抱強く学ぶほかはない。

(2) 文の聞き取り

例えば“田中明天去中国。”のような文を音だけで聞かせると、最初の“田中”で考え込んでしまう学生がいる。“你”や“我”などの人称代名詞ならまだしも、固有名詞しかも日本名が中国語音“tiánzhōng”になったものは耳になじみにくい。学生の不勉強とも言えるが、覚えていなければどうしようもない。

しかし、更に残念なのは、その学生でも分かりそうな“明天去中国”を聞く余裕がなかったことである。つまり、この学生が実際に聞いのは“tiánzhōng”だけということになる。

このようなことは、どの学習者にも、そして授業中いつでも起こっている事態だと筆者には思える。もしそれを学生の不勉強として度外視してしまうと、音声的学習は事実上一步も前に進まなくなる恐れがある。音声に慣れるためには音を聞くしかないのに、意味を考えていて実は聞いていないということであれば、慣れようがないからである。

考えてみれば、筆者自身外国語の授業においてどのように聞くのかを教えられたことがない。ただ何とはなしに音声を聞かせられ、分かったり分からなかったりしていただいだけである。本来、学習者に対してどのように聞くのかということが説明されなければならないのではあるまいか⁵⁾。

それでは「どう聞くのか」と言えば、筆者の考えは以下のようなものである。

『一文⁶⁾を、意味にこだわらず、音として全て聞きとること』

文字とは異なり、音声は瞬時に消失してしまうものであるから⁷⁾、それを一時的に記憶しておく必要が生じる。そうしてやっと書かれた文を見たのと同じ状態になると言えよう。聞き逃してしまえば、白紙のページを見るのと同じことになってしまう。

音声を聞く際、一番の障害になるのは意味を取ろうと身構えることではなからうか。単語の意味などは聞いた瞬間に閃くのならいいのだが、考えて思いだそうとしたり、或いは勘を働かせようなどとしてはいけないのである。

もちろん「意味にこだわらず」と言うのは、「意味が分からなくてもよい」ということではない。外国語が分かるというのは意味が分かるということだとも言えるのだから、最終的には意味が分かるようにならなければ困る。

これは謂わば学習上の戦略である。音に慣れるために、音声を聞く時は意味に対して過度の関心を持たないようにするだけのことである。一方、学習のどこかでは、聞いても意味が分かるようにするための準備をしていかなければならない。具体的には、音声と意味との対応を覚えて行くことであるが、授業中これを行っているのが、教師の先導で単語や教材文を音読している時である。

こうした音読では、意味と音声との対応ばかりでなく、ピンインや漢字と音声との対応をも学習している⁸⁾。

本来、意味と音声との対応は翻訳を介した間接的なものであるのに対して、ピンインや漢字と音声との対応は直接的なものである。直接的なものに十分慣れたうえで間接的なものに進むのが理想であるが、現実には意味にばかり関心が集中しがちである。学習者ばかりでなく教える側においても。

以上述べた「音声だけでも聞き取っておく」ということができるならば、実際のコミュニケーションの場面では大変役に立つ。と言うのは、授業などとは違って、分からなければ相手に尋ねる事が出来るからである。たとえば、聞いた言葉の中に分からないものがあつたなら、単にその言葉を上がり調子で繰り返せば、相手は説明を加えたり、言い方をかえたりしてくれるはずだ。それが

日常ごく当たり前の会話風景なのである。

3. 練習方法

さて、このような「一文を全て聞き取る」という聞き方を身につける練習方法は、どのようになるのだろうか。授業中、音声を聞く際に注意を促すということはもちろんであるが、それとは別に専らに練習を行うとすれば、以下のようなやり方が考えられる。これは教科書を使わず、音声教材だけを使って行う⁹⁾。

- (1) 一文単位で復唱する。
- (2) 復唱したものをピンインで書く。
- (3) ピンインを漢字に直す。

教科書を使わず音声だけを聞くということに驚く学生は多いと思われる。もちろんこれは中国語を初めて習う学生に行うものではなく¹⁰⁾、一年なり学習した学生に対して、その学生が以前教科書を使って学習した内容と同程度のことを、音声教材だけを使って行うものである。そうでなければ、上記の作業を進めることは、たとえ教師の手助けがあったとしても、難しいと思われる。もし、学生が一人で行うならば、すでに習った教科書の音声教材を使うことが考えられる。

(1) は全部の音を聞いたかの確認、(2) は正確に聞き取れているかの確認、(3) は意味の確認となる。

あるいはパソコンを使うやり方も考えられる。

通常のパソコンには文字入力のためのソフトウェア¹¹⁾が組み込まれているので、新たなソフトウェアを必要とせず、世界中の言語が入力できる¹²⁾。

中国語ではキーボードからピンインを打って漢字に変換するが、この時、日本語を打つ場合と同様に入力装置が最適な漢字を選んでくれる。つまり、音さ

え正確につかめれば意味が分かるのである。パソコンの助けを借りてではあるが、音声から意味へという正常なあり方を実感できるのではなからうか¹³⁾。

パソコンを使う場合は、上記(1)～(3)が「聞いたものを入力する」という一つの作業になる。

4. おわりに

「日本人が外国語を勉強すると、必ず区別のできない音があって、それで日本人は外国語ができないのだ」と言うとき訝な顔をする人が多い。音の聞き取りは母語の影響を受ける。日本語で使われる音(音節)があまりにも少ないため、その枠組みでは中国語の音声可不足なく受け止めることができない。多かれ少なかれ、区別できないものが出てしまう。

一方、言葉(母語)は通常実際の状況の中で話されているものを真似て習得していく。外国語の場合、状況がない所で学習を行うという不便はあるが、教材として用意されたものであれ、真似して覚えるということには変わりがない。音ははっきり捉えられなければそもそも真似も十分にはできないのではなからうか。

人間が生後半年余りの間に習得すると言われている母語の音韻体系はその後一生の間利用され続ける。意味的にどんなに難しい言葉でも、音声的には既知の音韻の組合せでしかないのである。外国語学習においても、この音韻体系習得に当たる部分を見捨てることはできない。日本人学習者が中国語を学習する際、それを完全に行うことが極めて難しいという事情があるにしてもである。

注：

1) 拙稿「中国語の准同音語について」であげたものに多少手を加えた。

① -1、③ -1,2,3 など母音(韻母)だけをあげたものは、それに同じ子音(声母)が付いた場合も含み、① -2、② -2 など子音だけの場合は、同じ母音が付いた場合を含む。

また、このような混同が生じる原因は、中国語では異なる音であっても、それらが同じ日本語音で受け止められてしまうからである。①③では以下のようになる。

① (1) ん、(2) ら、り、る、れ、ろ

③ (1) う (2) お (3) い (4) ふ (5) ず、つ、す (6) じ、ち、し (7) じゃ、ちゃ、しゃ (8) じゅ、ちゅ、しゅ (9) じょ、ちよ、しよ

- 2) 音の識別は瞬時にできなければ役に立たない。例えば、母音が an と ang 或いは in と ing の音節を並べて発音し、どちらが n で終わり、どちらが ng で終わるかを言わせてみると、二つの音節がはっきり、ゆっくりと発音されるなら、多くの学生は区別ができる。しかし、これらの音節が文の中で発音されると、区別を感じるができなくなってしまう。
- 3) ①は舌の位置等を指摘するのみで、聞き取りに関しては教えようがないとも言える。あまり拘ると、ng を「ング」と言おうとしたり、r の摩擦部分を引き延ばし過ぎて、かえって不自然な発音になる恐れがある。
- 4) その最たるものが「j,q,x に続く ü は点を取って u とする」であると筆者は思っている。これは例えば、ju を jiu と発音して気付かないというような、学習者を間違った発音に導くばかりでなく、更には、例えば duan と juan、dun と jun 等異なる母音の綴りが同じになることから、音の違いに気づく学習者にとっては、ピンインが分けの分からない記号との印象を持たせてしまうのではなかろうか。

ちなみに、丁迪蒙 2007 は、点を省略しない jū, qū, xū, yū を示して音声を教え、その後すぐに漢字「句子、举手、出去、歌曲、需要、下雨」等を示して発音に慣れさせ、以後は漢字を直接読むというやり方で、ピンインを見ることによる発音の乱れが防げると報告している。

結局「ピンインを見るな」と言っているのであるから、“汉语拼音方案”が修正されないかぎり、現行の規則をしっかりと覚えるしかないということである。

- 5) わざわざテープレコーダーや CD プレーヤーを持参して音声を聞かせても、

映像ほど興味を引くものではないので、聞かない学生は多いのではなかろうか。学生からすれば、教材文の解説や練習の前に聞いてもチンプンカンプンであろうし、後であっても、教材文の上に視線を走らせ「ここを読んでいるんだな」という確認をしているにすぎないのではないだろうか。

実は筆者も長い間、本文の解説と発音練習をしたら音声を聞かせるとか、まず聞いてから解説に入るとか、半ば惰性でやっていたように思う。何のために音声を聞かせるのかが曖昧だったのだ。

- 6) 想定している文は初級段階のものであり、漢字で 10 文字程度のものである。例えば「汉语会話 301 句」の模範文 301 個について、その文字数と所属する文の数は以下のようにになっている。一文の平均文字数は 7.7 字である。

字数	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
文の個数	4	13	23	25	45	49	35	35	18	21	11	6	9	5	1	0	0	1

- 7) 中国人の発話のスピードは平均毎分 245 文字とされている (孟国 2007)。単純に割れば一音節 0.24 秒ほどだが、単語の切れ目や文末には無音の部分が入るはずであるから、音声の存在する時間はこれよりずっと短いはずである。

テキスト付属の音声教材は、もちろんこれよりずっと遅い。例えば、「北京物語」の本文では、平均 120 字 / 分である。

- 8) 胡玉華 2009 には、教科書を見ながらの音読にたいして、「漢字を媒介とする認知過程が強化されることによって、日本人学習者のそもそも苦手な「音声」がいつそう弱化されてしまう」と警告している (146 頁)。

教科書を見ながらの音読は、筆者の観点からすれば、漢字またはピンインとその音声との対応を覚えることが主目的であり、初級段階には欠かせない練習方法の一つである。

- 9) これは会話等の実際の場面からしても当たり前のことと言えるが、さらに、音声を真剣に聞くためにはこういう方法にならざるを得ない。例えば、目を閉じて聞くと音はよりはっきりと聞こえるものだが、恐らく特に何かを見るというのではなくても、目からの情報は脳で処理されており、その分

中国語の音声学習について

聞くことへの精力が割かれてしまうからだろう。単に目をあけているだけでもこのようであるなら、教科書を見ながら音を聞くのは尚更であろう。

なお、胡玉華 2009 には「音声依拠型音読法」と名付けたが復唱法が提案されている(147頁)。これは、最初の一回は教科書を見ながら行うところから「音読法」と呼んだと思われるが、厳密に言えば「音読」ではなく、実質は、むしろここで言うのと同様な「復唱」だと考えられる。

- 10) ピンインやある程度の単語を知っていなければ作業が進まない。そもそも成人した者が母語の音韻体系と異なる外国語音を身につけることは、それ自体かなり難しいことであり、時間がかかる。いきなり音声だけでは何の成果も上がらないまま止めざるを得なくなるだろう。
- 11) 入力装置またはIMEと呼ばれる。中国語なら「中文IME」ということが多い。
- 12) ただし、デフォルトでは日本語だけが設定されているので、「テキストサービスと入力言語」でその他の言語は設定する必要がある。
- 13) 中国語では意味が分かって(=どの単語かが分かって)初めて正確な発音が分かるということがしばしば起こる。2-1 にあげた区別しづらい音節の存在がその原因であり、書かれたものにしがみつかざるを得ない原因ともなっている。

なお、入力装置の誤変換や漢字が示されても意味が分からない場合などは、当然教師が補うことになる。

参考資料及び文献

- 「北京物語－話す中国語－」, 董燕、遠藤光暁, 朝日出版社, 2002年4月1日
- 「汉语会话 301 句」第三版上、下, 康玉华、来思平, 北京语言大学出版社, 2006年
- 「人はなぜことばを使えるか－脳と心のふしぎ」, 山鳥重, 講談社現代新書 1427, 1998年11月20日
- 「「わかる」とはどういうことか－認識の脳科学」, 山鳥重, ちくま新書 339, 2002年4月20日

「汉语语速与对外汉语听力教学」, 孟国, 『世界汉语教学』, 2006年2期

「《汉语拼音方案》在对外汉语教学中的缺憾及辨正」, 丁迪蒙, 『上海大学学报(社会科学版)』第14卷第6期, 2007年11月

「シャドーイングと音読の科学」, 門田修平, コスモピア, 2007年11月1日

「赤ちゃんはコトバをどのように習得するか」, ベネディクト・ド・ボワソン＝バルディ, 藤原書店, 2008年1月30日

「《汉语拼音方案》存在的问题及改进策略」, 解植永, 李开拓, 北华大学学报(社会科学版)第9卷第2期, 2008年4月

「中国語教育とコミュニケーション能力の育成」, 胡玉華, 東方書店, 2009年3月20日

「中国語学習における准同音語について」, 岩崎皇, 『駒澤大学外国語論集』第11号, 2011年9月